

●モノグラフ

小学生ナウ

Vol. 8-9

子どもの道徳心をめぐって

目次

要 約	2
はじめに	4
1. 子どもたちの生活を追って	5
● 学校での子どもたち	5
● 家庭での子どもたち	7
2. 子どもたちのモラルをめぐって	11
● 悪いことをした経験	11
● モラルの間われる場面でどうするか	15
3. 親・教師のしつけと教育	18
● 何をどのくらい注意しているか	18
● 道徳の授業は今	25
4. 今後に向けて自分で子どもを育てる	28
● 子どもを取り巻く環境	28
● よいことをした体験	32
● よき市民教育を目指して	33
地球社会の子どもたち ⑨ アメリカーその3 I have a right. 深谷昌志	34
資料1 調査票見本	39
資料2 学年・性別集計表	49
資料A 自由記述からの抜粋	61

※おことわり：本文中に使用した写真は本文・テーマとはいっさい関係ありません。

 調査レポート 子どもの道徳心をめぐって 要約

目黒区立菅刈小学校教諭 土橋 稔

東京学芸大学教授 深谷和子

1. 調査の目的

道徳の時間の運用に関しては、現在まだ多くの人びとの間で合意を見ていない。この点についての方向性を見いだすための基礎資料の一部として、子どもの道徳心とその周辺領域を対象に調査が行われた。



2. 学校と家庭で

図1、図2が示すように、それぞれの場で価値があると思われる特性について自己評価させてみると「そういう自分ではない」とする反応は2～4割で、全体としては比較的肯定的な自己評価が多い。しかし「とてもあてはまる」よりも「まああてはまる」と、自己評価はやや自信なげである。また同一項目を比較すると、学校より家庭においての方がよくやっているのはどうしたわけか。(図5)



● 調査概要

1. 調査主題 子どもの道徳心をめぐって
2. 調査視点 子どもたちをめぐるさまざまな問題の中で、道徳教育に関心が寄せられている。子どもたちの中で「道徳」は、どの

ように受けとめられているのかを探ってみたい。

3. 調査項目 一番悪い(よい)ことをしたと
思っていること、母親の注意、先生の注意、
道徳の授業の楽しさ、道徳の授業形態、子
どもから見たおとなの社会、おつりが多か

3. してはいけないこと

してはいけないはずのことを、どのくらいしているかたずねてみると、図6に示したように項目によってその割合は変わるものの、けっこう少なからぬ数の子どもたちに逸脱行動の経験が見いだされる。



4. よいことをした体験

道徳心が身についていることをうかがわせるような「よいこと」を自発的にする態度は調査項目で見ると、はなはだ不十分である。(図19)

5. 道徳の時間

「とても楽しい(2割)」「わりと楽しい(3割)」を合わせると5割に達し、この時間は子どもたちには好評である。また「ためになる」とする子も「とても・わりと」を合わせると5割に達する(図11、図12)。しかしその方法にはあまり工夫が見られず、テレビをみるのと教科書の使用が一般的であるようだ。(図13)

6. 今後に向けて

この領域の教育の一端を学校が担わなければならないのはむろんだが、その内容を市民生活上必要な社会的行動ルールを学ばせること、そしてその底辺に、家族や友人など親しい人びとの人生に何らかの形で自分が役立とうとする動機、すなわち「他人への愛」の感情や態度をはぐくむこと、言い換えれば近代的な「市民教育」と考えることで、この授業も多くの場で進めやすくなり、またその内容や方向も間違いのないものになるのではなかろうか。

ったらどうするか、友だちの気分が悪くなり吐いたらどうするか、など。

4. 調査時期 昭和63年6月～7月

5. 調査対象 東京都、千葉、埼玉の小学5・6年生1,469名。

6. 調査方法 学校通しによる質問紙調査

7. サンプル数 (人)

学年/性	男子	女子	計
5年	416	362	778
6年	347	344	691
計	763	706	1,469



はじめに

また最近、改めて道徳教育充実の声が上がっている。それはたぶん、子どもたちの「いじめ」「自殺」等の問題行動、またはその原因となる自主性の乏しさ、他人との関わりの薄さなど、子どもの成長の姿の中におとなたちが大きな危機感を覚えはじめたことによるものだろう。

たしかに教室での子どもたちを見ていると、自分のことだけを考え、身勝手だと思う場面が少なくない。面倒なことはやりたくない、ちょっと苦しいとすぐあきらめてしまう、物をなくしても探そうとしない、手伝いはしないなど、子どもたちの成長の姿にいくつもの問題が生じてきていることが実感させられる。

しかし、だからといって、かつての「修身」の授業をほぼ踏襲すればよいとか、その理念も不確かなままに現行の道徳の時間の授業をただ熱心にやれば事が済むというわけのものではないのは、むろんである。家庭や学校や地域など、子どもの生活の場の状況が変化し、そこに生まれ育つ子どもたちの成長の姿もまた大きく変わってきている。この領域の新しい教育のあり方をどうすべきか、それには今後十分な時間をかけて研究調査や論議が必要であろうが、そのための基礎資料の一部として、ともあれわれわれは例によって、この領域の周辺に位置する子どもの意識や行動の特徴をひろいあげる作業を試みた次第である。

1. 子どもたちの生活を追って



学校での子どもたち

まずはじめに、子どもたちの学校での生活の様子をみたものが図1である。並んでいる①～⑯は「朝のあいさつ」「遅刻をしない」「後かたづけ」「掃除」「給食」など、子どもたちが学校という集団の中で、いつも求められている項目を集めたものである。全体を通して「とてもあてはまる」の割合が低いことが目につく。一番数値の高い「学校に遅刻をしない」という項目ですら、「とてもあてはまる」子は47.1%と5割にもみえない。そして、朝のあいさつもよくできる子は29%、使った物のかたづけ、係や当番の仕事、掃除などについても、低い数値を示している。

しかし、「とてもあてはまる」に「まあ」をプラスしてみると、①のあいさつから、⑯の忘れ物をしないまで、あまり大きな差はみられなくなり、どの項目でも6割を超える子

どもたちが、できていると答えている。つまり、「とてもあてはまる」と言えるほどにはできていないが、先生に注意されないように、まあそこそこはやっているという様子うかがえる。

さらにこれらの項目を分類整理し、学年・男女別に細かくみていくと、図2のようになる。図が示すように、「給食を残さず食べる」「外で遊ぶ」といった健康面を表す項目で男子の割合が高いほかは、ほとんどの項目で、女子がきまり正しい生活を送っていることがわかる。特に、「ボールのかたづけ」や「机の中の整理整頓」などは、女子に対して、男子の数値の低さが目立つ。そしてそれも、5年生の男子より、6年生の男子に顕著であり、また女子も、学年が上がるにつれて、逆に基本的な生活行動が、ゆらいてくる。

図1 学校での自分

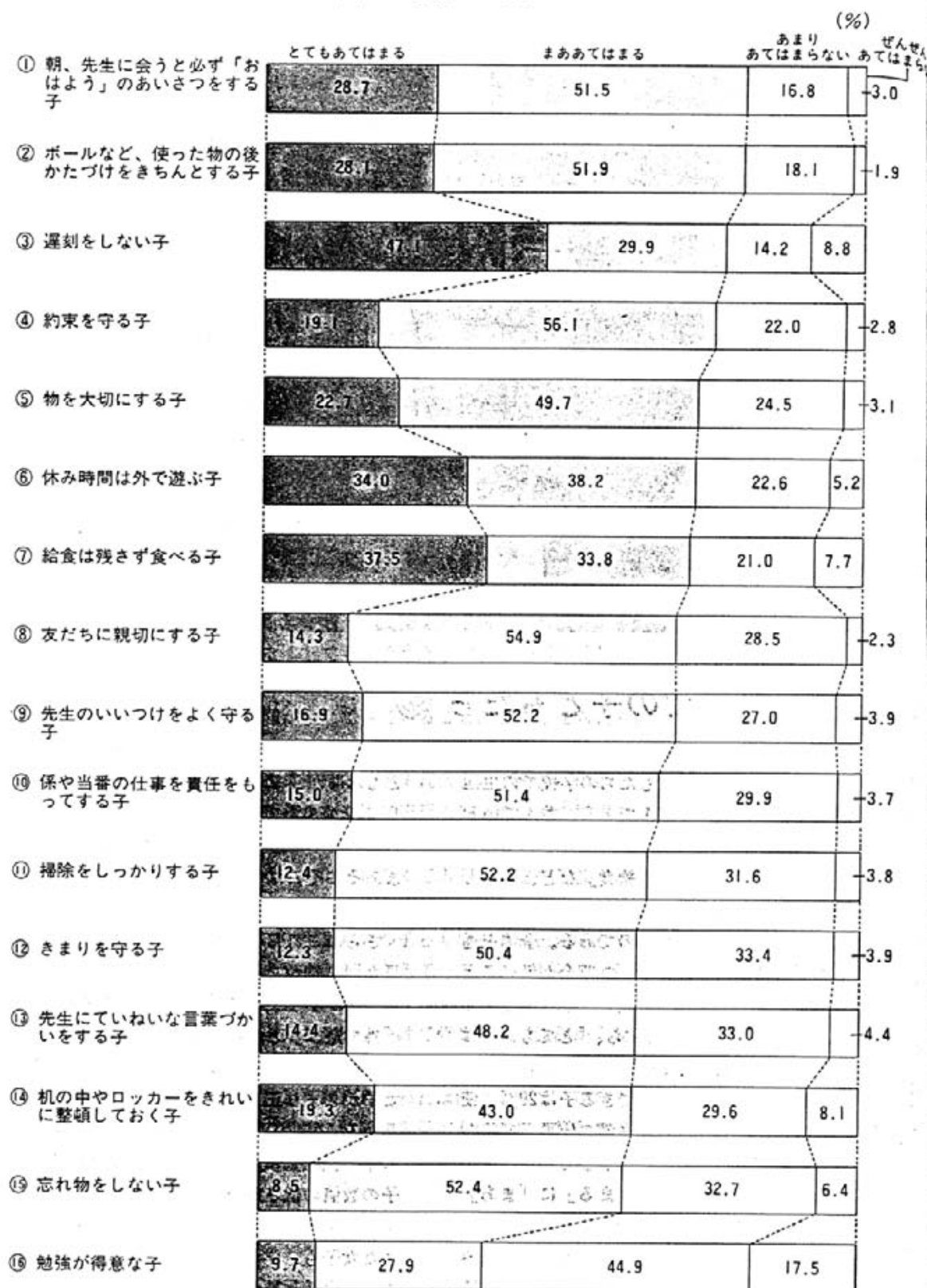
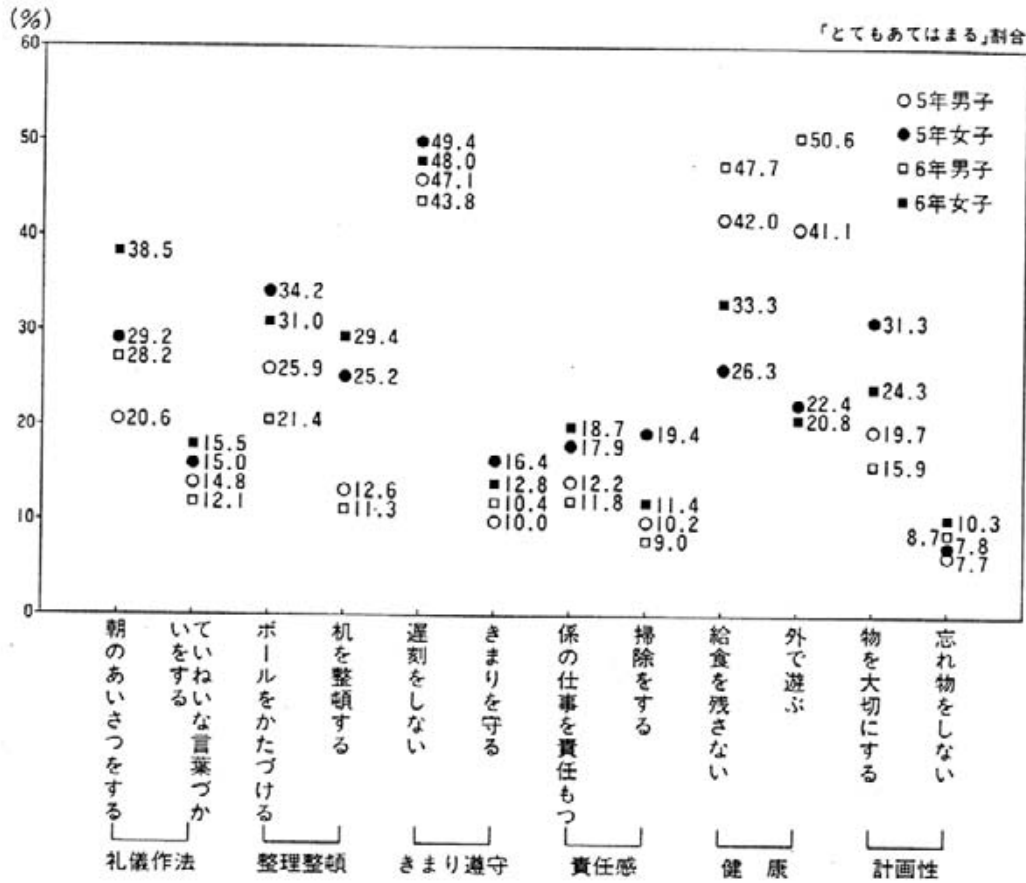


図2 学校での自分×学年・性



家庭での子どもたち

それでは、家ではどんな子でいるのだろうか。家庭訪問などで親と家庭生活について話す機会をもつと、学校ではリーダー的であり責任感の強い子が、家では意外に甘えん坊だったり、またその逆のケースなど、学校での生活と家庭での生活の様子がずいぶんちがっていることがある。図3をみると、家では、あいさつがよくでき、「ただいま」は当然としても、近所の人へのあいさつについても、4割近い子がよくでき、8割はまあできると答えている。そして、その他の項目でも、学校

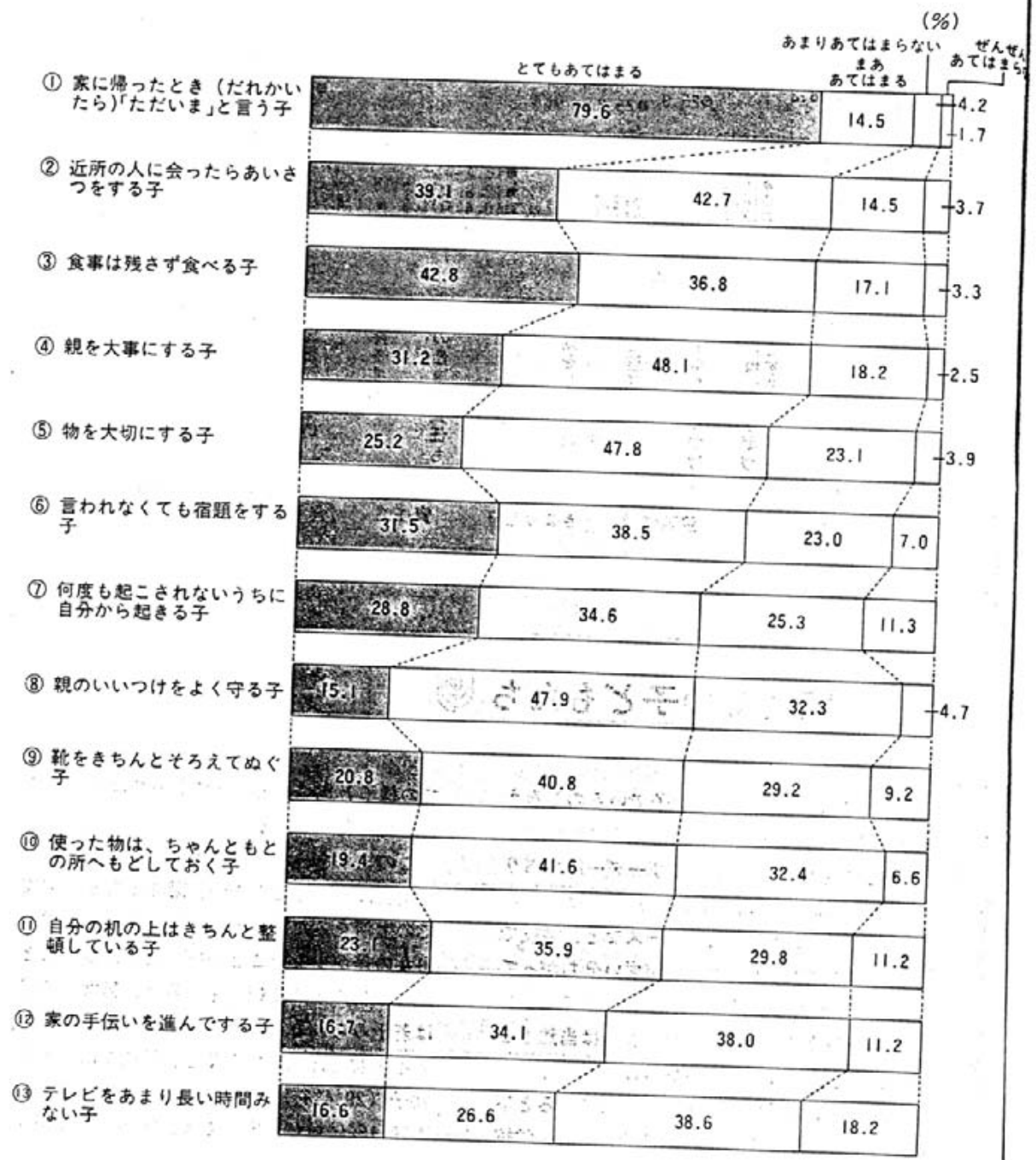
での様子と比べると「とてもあてはまる」割合が高くなっている。

この結果を、学校での生活と同様、学年・男女別に整理したものが、図4である。学校での生活をみた図2と比較してみると、学年男女の差が少ないことが特徴的である。たとえば「机の上の整理」をみると、男女間の差は若干みられるものの、学校ほどの差はない。6年男女を比較してみると、学校では、6年女子(29.4%)、6年男子(11.3%)でその差18.1%に対し、家庭では、26.9%と19.6%

で、その差は7.3%しかない。というように、6年女子が学校ほどには家庭でしっかりしておらず、6年男子が、家庭ではがんばっている様子がみられる。この傾向は「親のいいつけを守る」「テレビを長時間みない」「自分か

ら起きる」などの項目でも同様であり、学年差、男女差がなくなってくる。一方、近所の人とのあいさつでは、男女間の差が大きくなる。つまり学校で、そして家庭でも他者を意識した外に向かったの行動では、女子がしっ

図3 家庭での自分

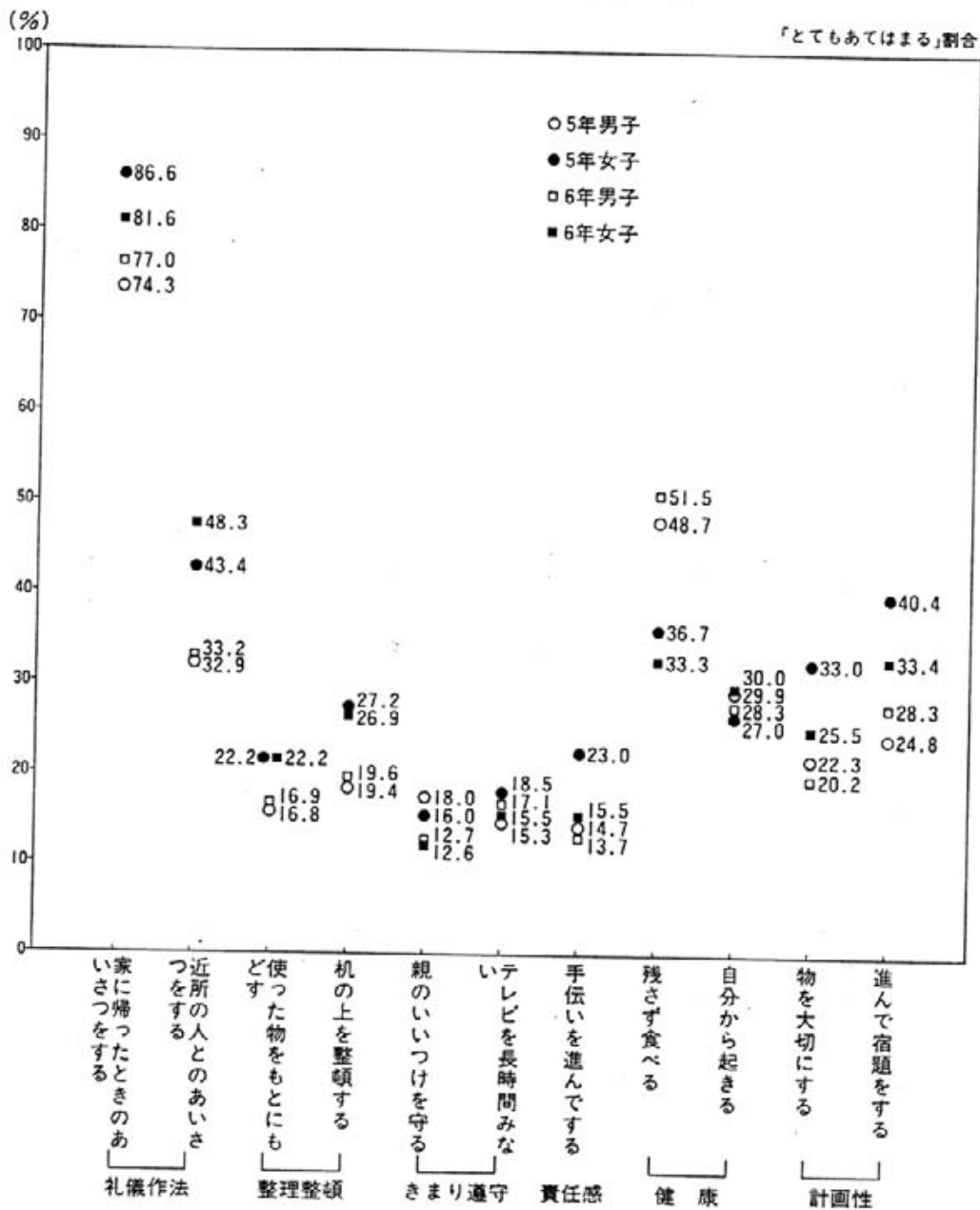


かりしており、家の中での個人的なことになると男女共に同様な結果が示されている。

最後にもう一度、子どもたちの学校での生活と家庭での様子を比較してまとめてみると図5が示すように、比較できるほとんどすべ

ての項目で、学校より家庭の方が「とてもあてはまる」割合が高くなっている。家ではしっかりしている子が、学校という集団の場では、それを発揮できていない。数値は若干その傾向を示しているが、問題は全体的にそ

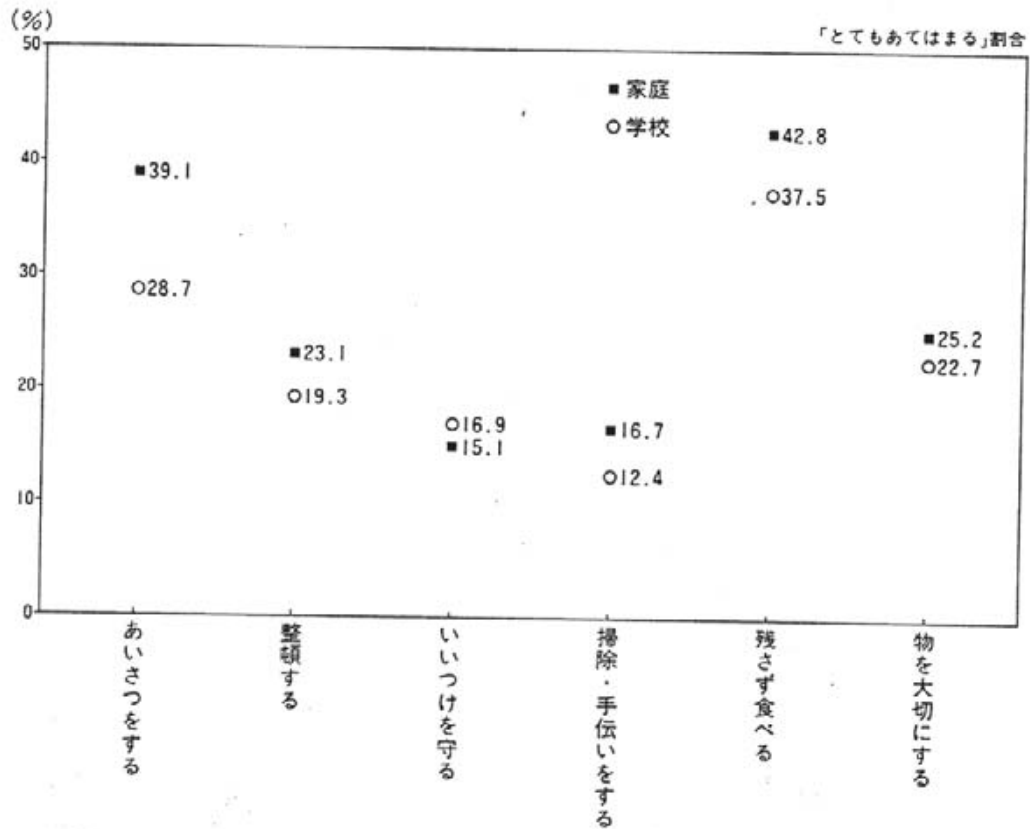
図4 家庭での自分×学年・性



の割合が低いことであろう。「整理整頓」「い
いつけを守る」「掃除・手伝いをする」「物を
大切にする」など、家庭教育の基礎となる項

目が、いずれも3割に達していない。家庭で
のしつけの甘さが、学校での実践の甘さを生
んでいるのではないかと思える結果である。

図5 学校での自分と家庭での自分



2. 子どもたちのモラルをめぐる



これまでみてきたように小学校5・6年生ならば、当然身につけていなければならないはずの基本的な生活習慣が、どうも中途半端であり、子どもたちの中にも自ら取り組んでい

こうとする意識が少ない。

そこで、もう少し場面を広げて、子どもたちの内面に迫ってみよう。

☞☞ 悪いことをした経験 ☞☞

図6は、学校を中心としたさまざまな問題行動について、その経験の有無を尋ねたものである。「うそをついたことが何回もある」が40%近く、「友だちの悪口を何回も言う」も同様に、そして、「自分で食べたお菓子のつつみ紙を道に捨ててしまう」「ガムをつつまないでそのまま捨ててしまう」など、30%近くの子が何回もそうしたことがある。また、「上ばかりのまま校庭に出る」「掃除を一生懸命しない」など、「2～3回ある」を含めると、5割を超す。さらに「お店の物をだまっ

て持ってくる」、つまり万引も、経験者が5.8%、調査対象1,469名中85名、など、調査当初の予想よりもはるかに高い数値を示している。

これらの数値には、別の意味で考えさせられるものがある。私たちの子どもの頃を思い出してみても、たしかにこのような経験はしてきたかもしれない。しかし少なくとも、かつての小学生にとってこれらの項目は、してはいけないことであり、たとえアンケートといえども、これほど平気で何回もやったとは答えなかったであろう。この平気で答えてしまっ

ているところに、ある意味で現在の子どもたちの問題を感じさせられる。遠足に行って食べたおやつつつみ紙を平気で、いや無意識にその場に残す。バスからおりた後の子どもたちの座席のまわりはごみだらけである。物を食べるときに、自分でむいたつつみ紙には関心を示さない。遊びたいときには、今、自分が土足なのか上ばきなのかに気づかない。また気づいていても、気づかないふりをしていられる。自分のやりたいこと以外には無関心でいられる、自分勝手な、未成熟な子どもたち、そして自分のしていることをたいして問題視していない子どもたちの姿が現れているのではなからうか。

さらにこの結果を学年・男女別に示したも

のが、次の表1である。男女共に、学年が上がるにつれて数値が高くなる。○印をつけた、いけないことをした経験の多い子どもたちは、圧倒的に6年生の男子に多い。一方、最小値はすべて5年生女子である。

巻末の資料Aに子どもたちがこれまで一番「悪いことをした」と思っていることを、いくつかぬき出してまとめた。友だちとの関係で、精神的にあるいは肉体的に傷つけてしまったことの体験が多く述べられている。いたずら半分に行ったことが大きな結果となってしまったこともあるが、多くは自分でも悪いと知りながら、自分をコントロールできずにしてしまったことが多い。人間の弱さをのぞかせたデータとも言えそうだ。

図6 いけないことをしたこと

	(%)			
	何回もある	2-3回ある	1度ある	ぜんぜん ない
① うそをつく	37.8	34.8	20.7	6.7
② 友だちの悪口を言う	32.6	35.2	21.2	11.0
③ 自分で食べたお菓子のつまみなど、ごみを道に捨てたりする	27.1	33.2	22.6	17.1
④ ガムをつつまないで、そのまま捨てる	23.2	21.8	21.4	33.6
⑤ 上げきのまま校庭に出る	23.0	37.5	16.9	22.6
⑥ 掃除を一生懸命しない	21.6	38.0	23.4	17.0
⑦ 自分で遊んだ遊び道具を、そのままにしておかたづけしない	8.6	27.3	26.5	37.6
⑧ 友だちがいやがることを、わかっている	7.9	23.2	33.5	35.4
⑨ 友だちを仲間はずれにする	7.7	25.4	29.9	37.0
⑩ 自分のまちがいを人のせいにする	6.5	25.8	32.8	34.9
⑪ 机にマジックやペンでいたずら書きをする	6.1	8.0	14.0	71.9
⑫ 土足で教室や廊下を歩く	5.1	11.0	16.5	67.4
⑬ テストのとき、友だちの答えをみる	4.1	11.8	21.6	62.5
⑭ 友だちの教科書や持ち物をだまって借りる	2.1	8.8	15.6	73.5
⑮ お店の物をだまって持つてくる	1.0	1.3	3.5	94.2

表1 いけないことをしたこと×学年・性

(%)

	5 年		6 年	
	男子	女子	男子	女子
うそをつく	72.5	<u>68.5</u>	(78.6)	70.9
悪口を言う	67.4	<u>59.2</u>	(76.4)	68.6
ごみを道に捨てる	59.7	<u>50.0</u>	(72.4)	59.6
ガムをそのまま捨てる	53.6	<u>31.1</u>	(62.0)	32.3
上ばきで校庭に出る	54.6	<u>52.6</u>	(71.2)	65.7
掃除をしない	62.7	<u>42.6</u>	(77.4)	55.7
遊んだ道具をかたづけけない	36.6	<u>25.3</u>	(52.2)	29.8
いやがることをする	35.3	<u>14.0</u>	(50.3)	25.0
仲間はずれにする	34.0	<u>26.7</u>	(40.6)	31.5
人のせいにする	34.0	<u>19.9</u>	(46.3)	29.0
いたずら書きをする	15.9	<u>7.6</u>	(24.6)	8.2
土足で歩く	(18.8)	<u>9.0</u>	16.4	10.0
テストをみる	15.4	<u>12.0</u>	(23.3)	13.3
持ち物をだまって借りる	9.5	<u>4.4</u>	(17.3)	13.1
お店の物を持ってくる	2.0	<u>0.9</u>	(5.5)	0.9

「何回も+2~3回ある」割合

○印は最大値、~~~~印は最小値

モラルの間われる場面でどうするか

次に、子どもたちにその人としてのモラルが問われるような場面を示し、そうした状況で子どもたちがどんな対応をするかを探ってみた。

まず、善悪のけじめと、自分にとっての損得との葛藤場面をみたのが表2と表3である。「禁止されている自転車で学校に行こう」とさそわれた場面を考えてみる。表2に示すように、禁止されているが自分も一緒に行ってしまう者は全体の26%、残りの74%は、自分はきまりは守って自転車に乗らないと言う。そして、友だちにも注意して、2人で歩いていくようにするという者も40%を超す。子どもたちのきまりを守ろうとする気持ちは、紙面上では意外に強いように思われる。

しかし、「スーパーで買い物をしておつりが500円多かったとき」という表3では、お店の人におつりを返す者が63%いるものの、返さない者も4割近くに達する。善悪のけじめが金銭感覚においては、あまり十分には働かないのだろうか。500円といえば、子どもにとっては大金であり、ポケットに入れてしまえるような金額ではないと思っていたのに。

また表4と表5は、友だちとの関係をみたものである。表4「友だちが吐いてしまったとき」遠くへ逃げる子はわずか14%。多くは、

相手の状態を考えて言葉をかけることができ、さらにかたづけようとする者も、1割いる。また表5「クラスで仲間はずれにされている友だち」に対しても、仲間に入れてあげようとする者が56%、一緒に遊んであげようとしている者が25%と、紙面上だがなかなかの友だち思いが見うけられる。

そして表6「校庭にボールがころがっているとき」でも、自分が使った物ではないが、そのままにして帰るといふ子は4割。6割の子は、なんらかの方法でボールをみつけたらかたづけようとしている。また表7「ボールをけって、体育館のガラスにひびを入れてしまったとき」も、8割近くがきちんと先生を探してあやまりに行くと答えている。

これらのいわば子どものモラルが問われる場面での対応では、子どもたちは思ったより相手に対する思いやりの心や自分の失敗を素直に認める気持ちも強くもっているかのようである。

これは単にアンケートの際の紙面上の反応ともみられそうだが、しかし日常学校場面では、これに似た子どもたちの行動パターンはよく見聞されるところでもあり、たてまえ上の数字とみてしまっはかわいそうだという気がする。

表2 禁止されている自転車で、学校に行こうときそわれたとき

(%)

尺 度	属 性	全 体	男 子		女 子	
			5 年	6 年	5 年	6 年
			自転車で一緒に行く	26.1	26.4	42.3
自分は歩いていく	32.8	37.8	33.6	27.6	31.3	
2人で歩いていくようにする	41.1	35.8	24.1	60.1	44.7	

表3 スーパーで買い物をして、おつりが500円多いことに気づいたとき

(%)

尺 度	属 性	全 体	男 子		女 子	
			5 年	6 年	5 年	6 年
			間よるごんで自分のこづかいにする	15.5	19.1	29.1
悪いと思うけれど自分のこづかいにする	22.0	22.0	21.9	19.5	24.6	
お店の人に返す	62.5	58.9	49.0	76.3	66.0	

表4 友だちが気分が悪くなり、少し吐いてしまったとき

(%)

尺 度	属 性	全 体	男 子		女 子	
			5 年	6 年	5 年	6 年
			速くへ逃げる	13.9	19.2	22.6
「だいじょうぶ」と声をかける	75.8	69.9	71.0	82.3	81.0	
かたづけてあげる	10.3	10.9	6.4	10.4	13.4	

表5 クラスで仲間はずれにされている友だちがいるとき

(%)

尺 度	属 性		男 子		女 子	
	全 体	5 年 級	6 年 級	5 年 級	6 年 級	
						5 年 級
そのままにしている	19.8	23.4	24.9	14.0	16.2	
だれもないとき遊ぶ	24.5	24.4	24.9	25.5	23.0	
仲間に入れてあげる	55.7	52.2	50.2	60.5	60.8	

表6 放課後、校庭にボールが2、3個ころがっていたとき

(%)

尺 度	属 性		男 子		女 子	
	全 体	5 年 級	6 年 級	5 年 級	6 年 級	
						5 年 級
そのままにして帰る	39.7	34.5	54.6	28.9	42.0	
どこか1か所にまとめておく	25.9	28.5	19.5	30.3	24.9	
ボール置き場に戻しに行く	34.4	37.0	25.9	40.8	33.1	

表7 ボールをけて、体育館のガラスにひびを入れてしまったとき

(%)

尺 度	属 性		男 子		女 子	
	全 体	5 年 級	6 年 級	5 年 級	6 年 級	
						5 年 級
そのままにして帰る	7.7	8.0	12.5	4.7	5.6	
ひびをとめて帰る	14.5	15.8	16.5	14.8	10.6	
あやまりに行く	77.8	76.2	71.0	80.5	83.8	

3. 親・教師のしつけと教育



これまで、子どもたちの生活を追いながら、その中でいくつかの問題点をひろい出してきた。本章では、子どもたちの生活に直接関わ

っている母親や、学校の教師にスポットをあて、しつけの場面から、さらに道徳の授業を通して、子どもたちの問題点を考えてみたい。

何をどのくらい注意しているか

まず、家庭での母親のしつけ（注意のしかた）をみたものが図7である。母親の小言の筆頭は、「使った物のかたづけ」で、「とても」と「わりと」を合わせると7割を超える。次に、「自分のことは自分で」「人に迷惑をかける」が続く。「勉強」についても注意する割合が高く、4番目に位置している。一方、子どもたちがあまりできていない「手伝い」については、親の注意もあまりなされておらず、「とても」と「わりと」を合わせても42%にしかならない。

続いて、図8で先生の注意の内容をみると、

1位は「学校のきまりを守るように」で、「とても」と「わりと」を合わせると75%。かなり繰り返し注意されている様子がうかがえる。また母親と同様に「人に迷惑をかけるように」も上位にきている。一方、母親の関心の高かった「勉強」については、先生の場合7位と、母親ほどではない。

母親の注意と先生の注意を比較してまとめたものが図9である。全体的には先生の注意の割合が高く、「学校のきまりを守るように」「人に迷惑をかけるように」「友だちの悪口を言わないように」など、人との関わりの

場面に対する注意が高い。一方、母親の方は「使った物のかたづけ」「自分のことは自分でする」「親に文句を言わない」など、個人で守るべきことについて注意する割合が高くなっている。

さらに、母親や先生の注意がだれに向けられているかをみたものが表8と表9である。表の○印が示すとおり、母親も先生も、女子より男子に対して注意する割合が高く、そし

てそれは、5年男子に集中して行われている。さらにこの表の中で興味深いのは、女子に対する母親と先生の注意の違いである。5年女子をみると、家では「かたづけ」「言葉づかい」「手伝い」は男子より注意されているが、学校ではほとんどすべての項目で注意の頻度が最少となる。これは家庭でのしつけの成果とうけとっていいのであろうか。

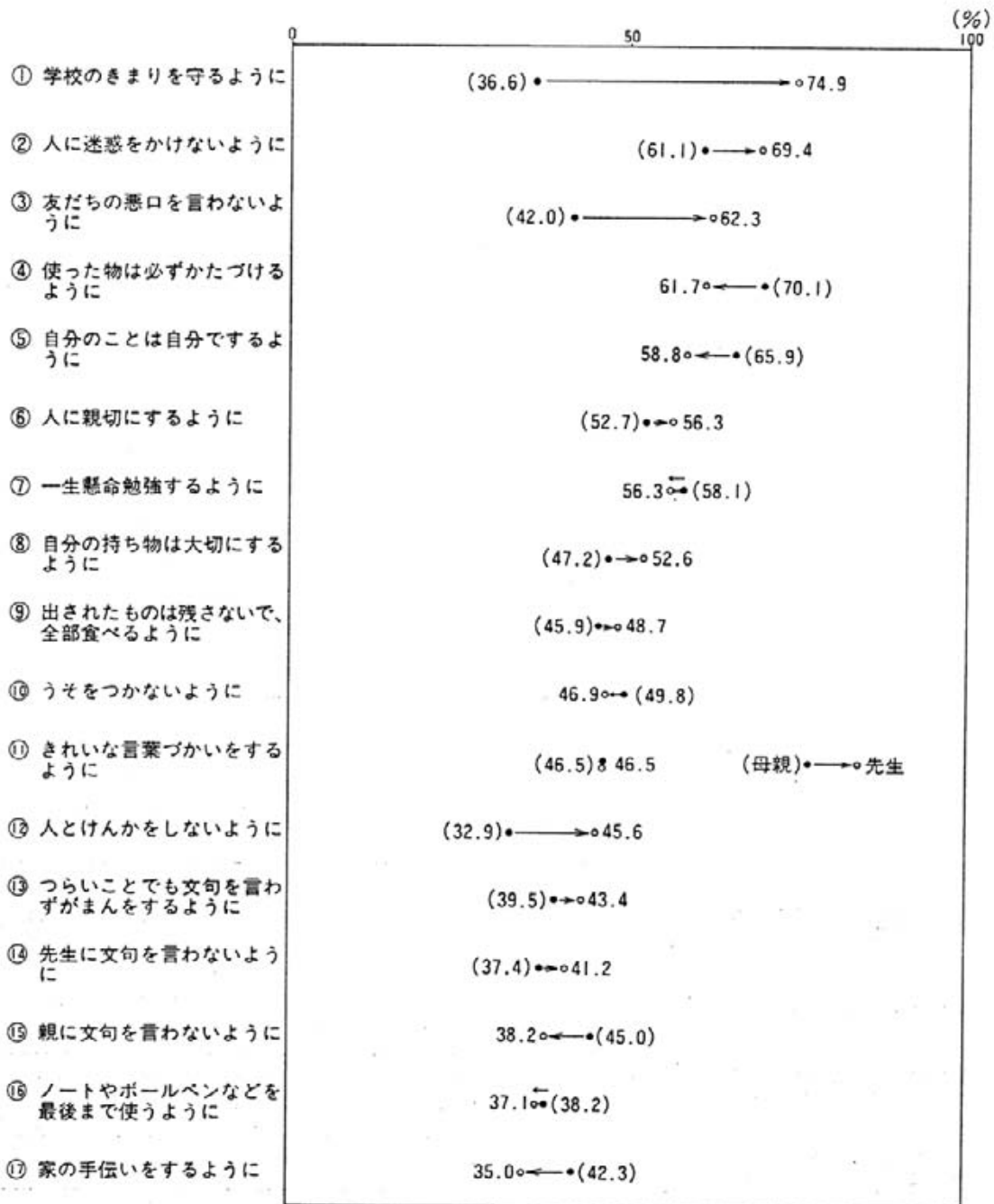
図7 母親の注意

	(%)				
	とても きびしく注意する	わりときびしく言う	少し言う	あまり 言わない	ほとんど 言わない
① 使った物は必ずかたづける ように	36.6	33.5	19.0	6.8	4.1
② 自分のことは自分でするよ うに	31.4	34.5	23.1	6.8	4.2
③ 人に迷惑をかけないように	29.8	31.3	24.9	9.6	4.4
④ 一生懸命勉強するように	34.1	24.0	22.3	10.4	9.2
⑤ 人に親切にするように	27.2	25.5	24.3	14.2	8.8
⑥ うそをつかないように	28.3	21.5	21.0	14.6	14.6
⑦ 自分の持ち物は大切にする ように	15.7	31.5	33.1	13.4	6.3
⑧ きれいな言葉づかいをする ように	23.6	22.9	23.7	16.5	13.3
⑨ 出されたものは残さないで、 全部食べるように	20.7	25.2	24.3	17.6	12.2
⑩ 親に文句を言わないように	26.0	19.0	18.4	16.4	20.2
⑪ 家の手伝いをするように	17.2	25.1	30.3	16.6	10.8
⑫ 友だちの悪口を言わないよ うに	20.3	21.7	22.9	18.1	17.0
⑬ つらいことでも文句を言わ ずがまんするように	19.3	20.2	21.2	18.4	20.9
⑭ ノートやボールペンなどを 最後まで使うように	18.5	19.7	23.7	23.2	14.9
⑮ 先生の悪口を言わないよう に	25.3	12.1	12.9	16.2	33.5
⑯ 学校のきまりを守るように	17.4	19.2	26.6	18.7	18.1
⑰ 人とけんかをしないように	16.9	16.0	20.3	20.2	26.6

図8 先生の注意

	(%)				
	とてもきびしく注意する	わりときびしく言う	少し言う	あまり言わない	ほとんど言わない
① 学校のきまりを守るように	42.0	32.9	16.1	4.6	4.4
② 人に迷惑をかけないように	33.7	35.7	19.2	7.0	4.4
③ 友だちの悪口を言わないように	34.1	28.2	20.6	10.8	6.3
④ 使った物は必ずかたづけするように	29.6	32.1	22.8	9.7	5.8
⑤ 自分のことは自分でするように	26.5	32.3	24.7	9.6	6.9
⑥ 人に親切にするように	28.5	27.8	24.2	12.1	7.4
⑦ 一生懸命勉強するように	27.7	28.6	25.1	11.1	7.5
⑧ 自分の持ち物は大切にするように	21.4	31.2	26.5	10.9	10.0
⑨ 出されたものは残さなくて、全部食べるように	26.6	22.1	22.0	17.6	11.7
⑩ うそをつかないように	28.2	18.7	23.3	17.3	12.5
⑪ きれいな言葉づかいをするように	23.9	22.6	23.1	16.9	13.5
⑫ 人とけんかをしないように	25.3	20.3	21.8	17.7	14.9
⑬ つらいことでも文句を言わずがまんするように	22.5	20.9	21.4	19.2	16.0
⑭ 先生に文句を言わないように	24.1	17.1	17.4	18.9	22.5
⑮ 親に文句を言わないように	21.6	16.6	20.6	19.0	22.2
⑯ ノートやボールペンなどを最後まで使うように	17.2	19.9	22.4	20.6	19.9
⑰ 家の手伝いをするように	15.3	19.7	31.0	20.1	13.9

図9 母親の注意と先生の注意



「とてもきびしく注意する+わりときびしく言う」割合

表8 母親の注意×学年・性

	5 年		6 年	
	男子	女子	男子	女子
使った物のかたづけをする	64.7 < 70.6		70.1 < (75.8)	
自分のことは自分でする	(67.9)	62.4	65.4 < 67.8	
人に迷惑をかけない	62.9	57.2	(64.0)	59.9
一生懸命勉強する	59.8	53.8	(63.5)	55.0
人に親切にする	50.7	50.2	52.3 < (57.9)	
うそをつかない	(53.8)	46.2	51.9	46.8
持ち物を大切に使う	51.2	40.5	(53.8)	42.7
きれいな言葉づかいをする	41.4 < 46.9		41.5 < (57.6)	
出されたものは全部食べる	46.7	42.4	(53.5)	40.7
親に文句を言わない	(49.6)	42.3	47.5	40.1
家の手伝いをする	36.0 < 42.1		37.4 < (55.0)	
友だちの悪口を言わない	(44.1)	43.2	40.1	39.8
つらいことでもがまんする	(43.7)	39.5	38.7	35.2
ノートなど最後まで使う	(44.1)	34.9	41.4	31.1
先生の悪口を言わない	(44.0)	37.2	37.2	30.1
学校のきまりを守る	(45.5)	33.8	32.9	32.2
人とけんかをしない	(36.0)	30.9	33.1	31.0

「とてもきびしく注意する+わりときびしく言う」割合

○印は最大値、～印は最小値

* 不等号は女子の割合が高いもののみ

表9 先生の注意×学年・性

(%)

	5 年		6 年	
	男子	女子	男子	女子
学校のきまりを守る	(77.7)	75.2	71.7 <	74.2
人に迷惑をかけない	(73.7)	66.4	69.0	67.7
友だちの悪口を言わない	(69.2)	61.5	58.9	58.3
使った物はかたづける	59.0	56.0	(66.8)	65.9
自分のことは自分でする	(60.4)	58.3	57.2 <	59.0
人に親切にする	(62.2)	53.1	54.1 <	54.8
一生懸命勉強する	57.7	53.4	(58.9)	54.6
自分の持ち物を大切にする	(55.8)	46.2	55.3	52.9
出されたものは全部食べる	(51.2)	48.1	49.0	45.8
うそをつかない	(51.2)	43.8	46.0	45.4
きれいな言葉づかいをする	45.9	38.0	(51.6)	50.9
人とけんかをしない	(50.2)	48.5	40.9 <	41.6
つらいことでもがまんする	44.6	41.5	(45.6)	41.6
先生に文句を言わない	42.5	40.2	(42.6)	39.5
親に文句を言わない	(40.7)	35.1	40.5	36.0
ノートなど最後まで使う	35.8	35.2	(39.6)	38.1
家の手伝いをする	36.5	32.9	32.7 <	(37.8)

「とてもきびしく注意する+わりときびしく言う」割合

○印は最大値、～印は最小値

* 不等号は女子の割合が高いもののみ

🌿 道徳の授業は今 🌿

家庭でのしつけ、学校での日常の生活指導と共に、子どもの道徳的心情を育てる場として、学校での道徳の授業はどのように行われているかをみてみよう。

まず、道徳の授業がどの程度行われているかをみたものが図10である。文部省の58年の調査によると、57年度1年間における「道徳」の全国平均授業時間は33.1時間であったと記されている。子ども対象の調査であるため、たとえ授業をしても子どもにはそれと理解できなかった（または記憶にない）場合もあるのだろう。実に17.3%の子どもたちが、道徳の授業はなかったと言っている。また、月に1度が4.8%、2週に1回が11.4%と、週1時間とする文部省の基準に達しないところもかなりみられる。

それでは、子どもたちは道徳の授業にどんな気持ちで参加しているのだろうか。それをみたものが図11と図12である。多少にせよ「楽しくない」子は意外に少なく、また半数を超える子どもたちが「とても・わりと」ためになると答えている。

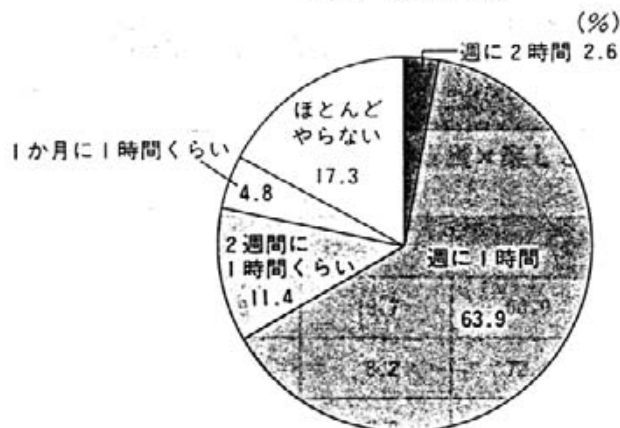
図13は、道徳の授業の様子である。テレビ

を使ったり、副読本を用いた授業が多く行われており、特別な資料を使ったり、自分たちで資料を探したりすることはめったにない。そのためか友だち同士でいろいろな意見がでるのは半数弱。これで十分な道徳性が身につくのだろうか。

最後に、子どもたちに道徳の成績を尋ねてみた。もちろん道徳の成績はつけていないので自己評価ということになる。結果は図14に示すとおり、2割の子どもたちが、それぞれよいと悪いの反応を示している。これを道徳の時間の楽しさとクロスさせたものが表10である。道徳の時間が楽しいという子が成績もよく、一方、つまらないという子の3分の1は道徳の成績が悪いと答えている。この結果から単純に述べることはできないが、仮に道徳の成績が悪い子というのが多少問題をもつ子であると推察すると、その子どもたちにとって道徳の授業はあまり有効でないということになる。

子どもたちは、これまでみてきたとおり、さまざまな問題（非道徳性）をもっている。

図10 授業回数



しかしそれ以上の問題点は、子どもたちが自分自身の問題性を意識できない点ではなからうか。道徳教育の目的は、「何がよい行為である」とか「何をしてはいけない」とかを知識的に学ぶことにあるのではなく、それが知識を越えて感性のレベルで子どもの身につけられ、さらにそれが日常の行為の上に具現してゆくことであろう。テレビや副読本を使って

の「お話」は、やはり「お話」であり、果たしてどこまでそれが日常の子どもの行動の上に一般化されるか。それを少しでも可能にするには、子どもたちの身のまわりの問題点を取りあげ、考えさせ、子どもたち自らに資料づくりなどを行わせるようなアクティブな授業の工夫が、他の教科にもまして必要ではなからうか。

図11 道徳の授業の楽しさ

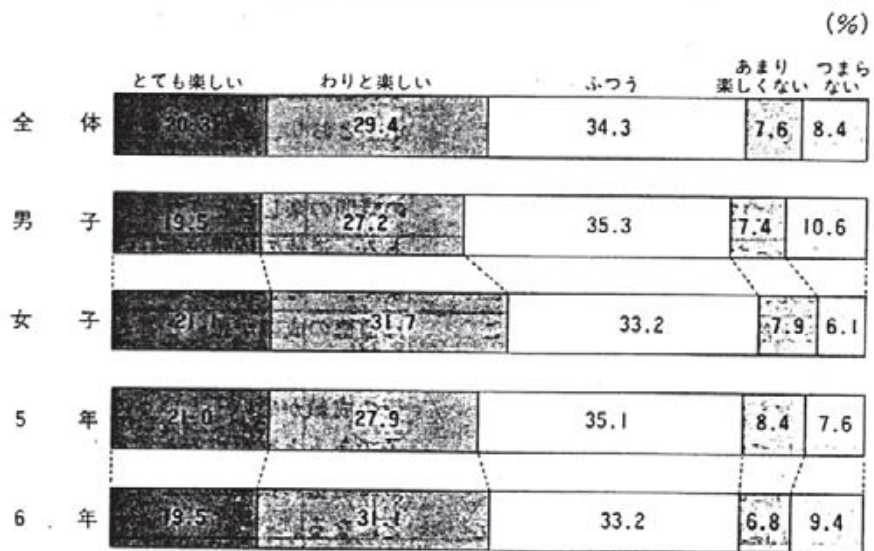


図12 道徳の授業はためになるか

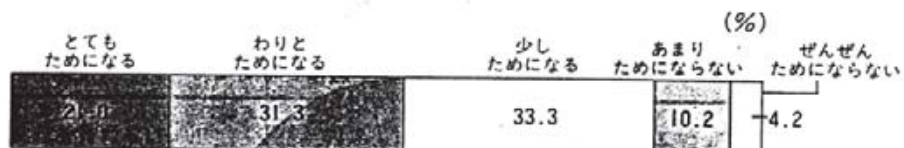


図13 道徳の授業形態

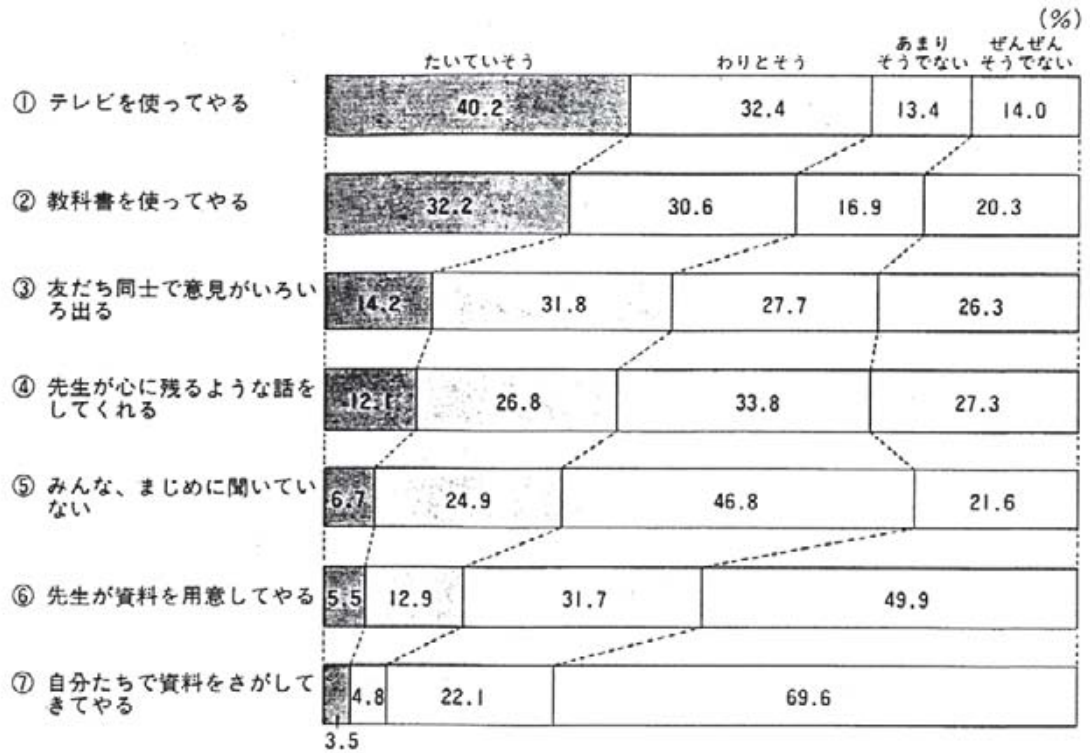


図14 道徳の成績



表10 道徳の成績×楽しさ

楽しさ	成績 (%)				
	とてもよい	わりとよい	ふつう	少し悪い	とても悪い
楽しい	7.9	19.7	60.9	8.4	3.1
つまらない	2.1	8.2	72.4	13.7	3.6
つまらない	4.7	7.9	52.0	19.1	16.3

4. 今後に向けて



以上子どもたちの道徳心とでも言うべきメンタリティと、その周辺領域の態度について問題の所在を探り、かつそれに対する親や先生の対応のしかたを見てきた。ここではもう

一步進めて、今後こうしたメンタリティを育てるためにおとなたちが何をすべきか、それを示唆するデータと共に、今後のこの領域の方法について考えてみることにしよう。

🌿 子どもを取り巻く環境 🌿

子どもの道徳性を育てるのは何と言っても日々の生活環境（市民社会での人びとのありかた）ではなかろうか。そうした意味で、今子どもを取り巻いているのはどんな環境かをみてみよう。図15、図16、図17は、家庭・クラス・おとなの社会など、それぞれの環境についての子どもの感じかたである。比較すると家庭に対する評価が一番高く、次いで社会一般。予想外に低かったのは学校（クラス）についてである。クラスは明るく楽しいが、自由度にも協力性や清潔さなどにも欠けると

いう。またそれぞれの環境の下位の項目に着目してみると、ほとんど共通しているのは「協力し合えていない」「きまりが守られていない」「清潔でない」ということになる。

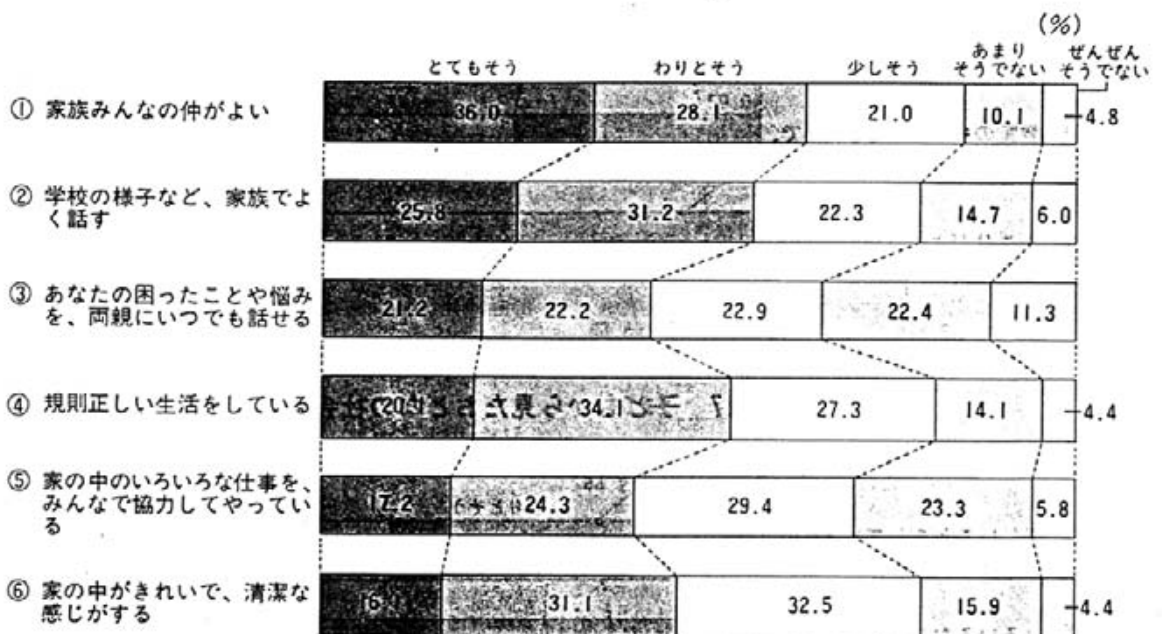
そしてこの評価は、前の章でみた子どもの問題点ともかなり一致してくる。たとえば「きまり」ひとつをとってみても、学校ではきまりが守られていると考えている子は「とても」と「わりと」を合わせても32%、おとなの社会でも36%となる。このような状況では、子どもたちの心の中にきまりを守っていこうと

する心情は育ちにくい。また、町の中はごみだらけである。そんな中から、子どもたちが平気でごみを捨ててしまうという行動が生まれてくるのではないかと考えられる。

そのことを確かめるデータの1つとして、家庭の雰囲気資料1のような方法で加算し、子どもたちの自己評価とクロスしてみた。図18が示すように、自分の家を「明るく、協力

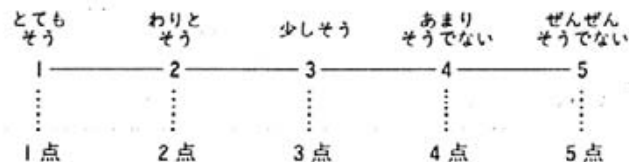
し合えて、規則正しい」などと評価している子は、そうでない子よりも道徳心に関連した領域ですべての項目において高い自己評価を示している。平凡な結論のようだが、まず子どもを望ましい環境に置くことの必要性和、そのためのおとなたちの努力が必要なのは、言うまでもないことだろう。

図15 自分の家の様子



資料1 家庭の雰囲気加算点の算出方法

図15の6項目について以下のように点数化し、加算点を算出する。



雰囲気よい	雰囲気ふつう	雰囲気悪い
6点～13点 (37%)	14点～17点 (30%)	18点～30点 (33%)

図16 クラスの様子

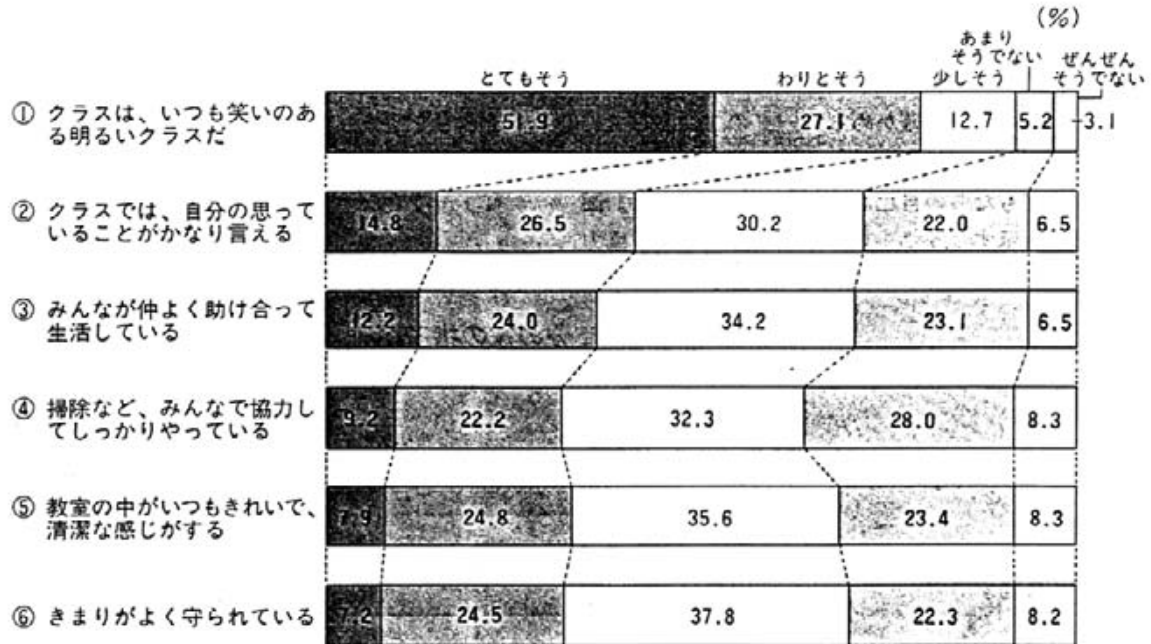


図17 子どもから見たおとなの社会

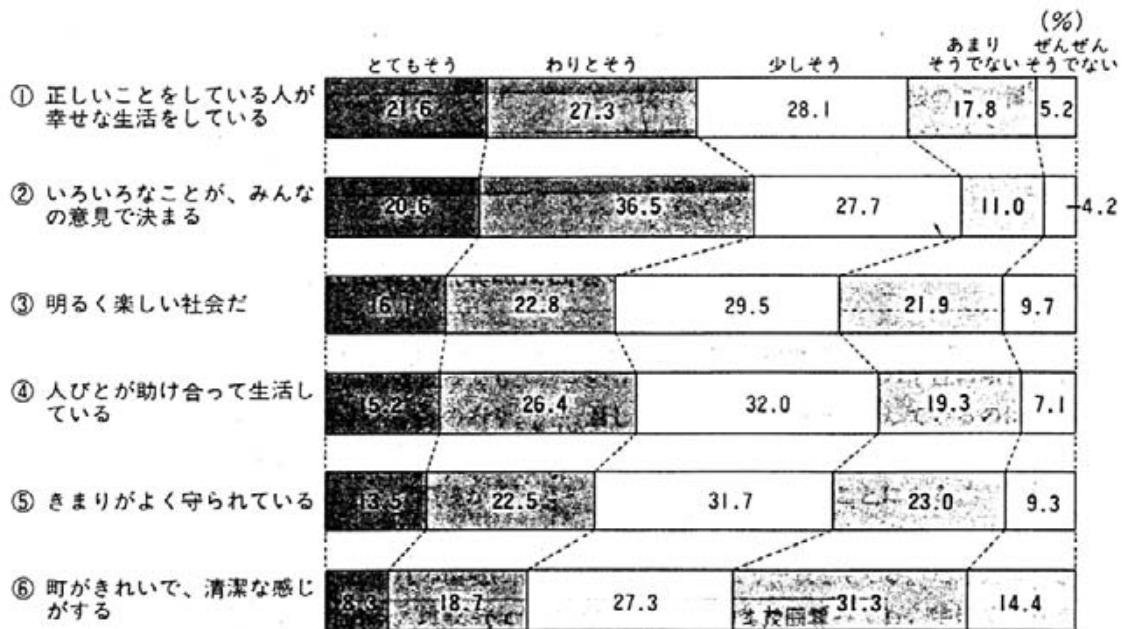
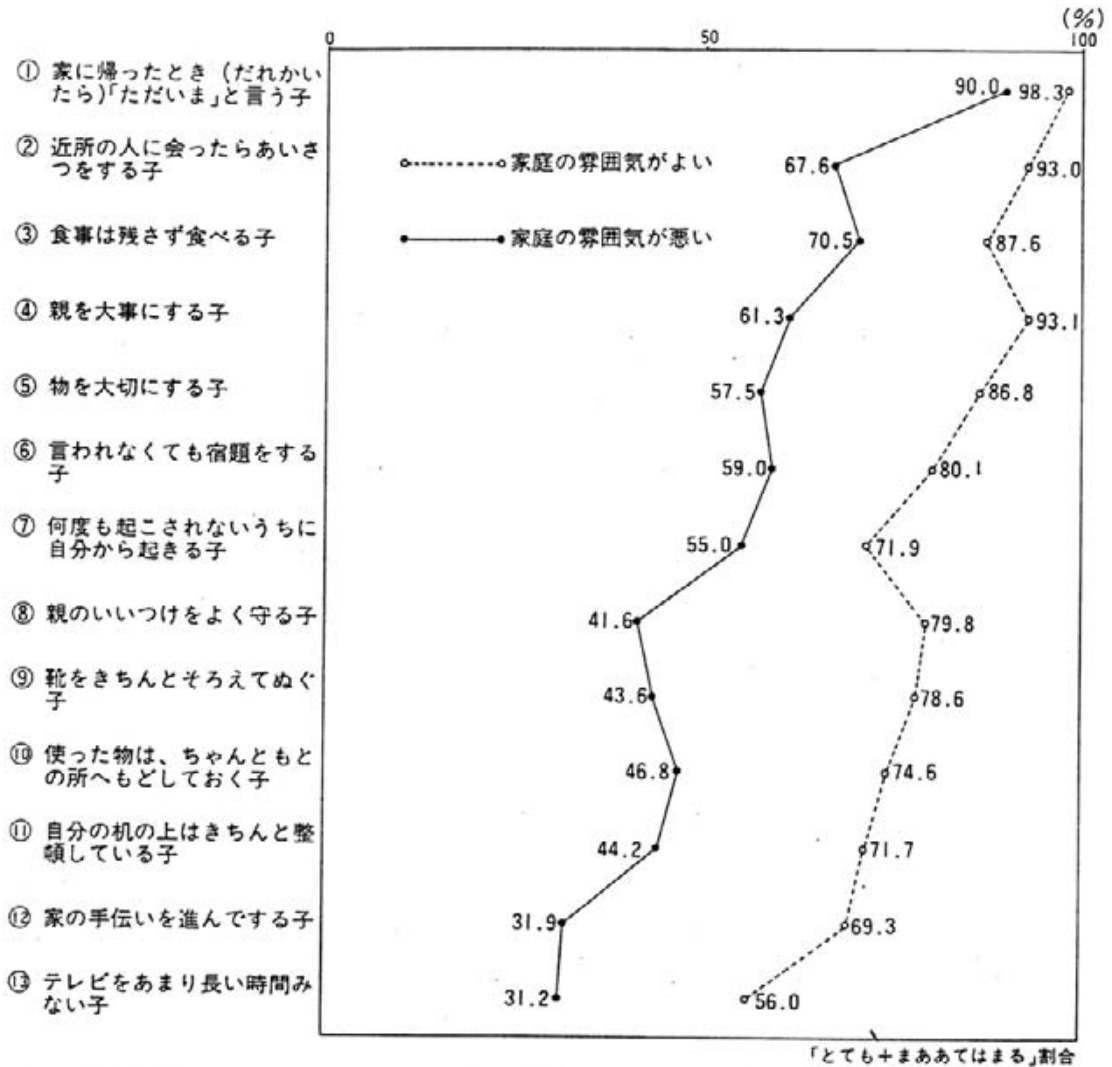


図18 自己評価×家庭の雰囲気



🌿 よいことをした体験 🌿

冒頭で指摘したように、今日道德教育の必要性を説く人びとが増加しているのは、「いじめ」をはじめとする子どもたちの問題行動が次第に増加していることからであろう。しかし子どもたちは、ただひたすら「悪い」だけの存在になってしまったのだろうか。俗に「道德的」と呼ばれるような「よいことをした体験」を全く持ってはいないのだろうか。

図19に示したように、いわゆる道德的な行為とみなされるものを子どもの日常生活場面からひろって、その経験回数を聞いてみると、「何回もある」者こそ少ないが、「ぜんぜんない」者はほとんどの項目でわずかである。つまり子どもたちは、少なくとも1、2回かそれよ

りも少し余分に、「よいことをした経験のある自分」という自己像をもっている。その点でおそらく子どもたちは（おとなの表現を使えば）、けっこう道德心の備わった自分、という自己認識をもっているかもしれないのである。

しかしもう一度図の項目を眺めてみると、少なくとも「よきモラルが育っている」と判断される態度は、図の「何回もある」とした子どもたちでなければならない。「2～3回もしくは1度」ではお話にならないと言ってよいだろう。つまり母親の仕事が大変そうなときに（思いやりから）手伝う子は4割に過ぎず、乗り物で席をゆずる態度が身についている子も3割でしかない。その割合は項目ごと

図19 よいことをした体験

	(%)			
	何回もある	2～3回ある	1度ある	ぜんぜん ない
① お母さんの仕事が大変そうなので手伝ってあげたこと	42.0	38.2	13.8	6.0
② 乗り物でお年寄りなどに席をゆずってあげたこと	30.0	38.1	20.4	11.5
③ 掃除中、すみのよこれている所をきれいにしたこと	21.9	36.4	28.0	13.7
④ その子の係の仕事が大変そうなので手伝ってあげたこと	16.6	37.2	28.4	17.8
⑤ 教室などに落ちているごみをかたづけたこと	16.0	44.5	26.1	13.4
⑥ 校庭にちらかっている遊び道具をかたづけたこと	12.2	31.0	34.4	22.4
⑦ 道に落ちているごみをかたづけたこと	9.2	25.3	31.5	34.0

にへってゆき、友人の係の仕事を（自分の仕事でないのに）手伝おうとする構えをもつ子も2割を切る。道に落ちているごみを拾って

かたづけようとする子も1割にみないのである。

よき市民教育を目指して

さてここまでの部分で、筆者らはわざと道徳心という言葉の定義をせずに、あいまいなままに文章を書きすすめてきた。ときにはモラルという語を使用した箇所もある。ご承知のように、長い間この教科の教育（またはこの教科の存在それ自体）をめぐる種々の論議がされてきており、現在もこの教科の扱いはむずかしさが残っている。できれば論議を回避したいという気持ちが多くの人びとの中に、今なおあるのではなからうか。

しかし本レポートを終ろうとするに当たって、その点をあいまいなままにして終わるのでは子どもに関するさまざまなデータを公表し、教師として、また子どもや教育の研究者として、それらのデータを意味づける作業をしてきたわれわれとして、少し無責任な気もしないではない。この点について思いつくままにいくつかの指摘を試みたい。

人類の長い歴史の中で、社会生活上の必要性から生み出され、道徳性とかモラルとか名づけられている社会的行動規範を子どもの中に育ててゆくことは、今後ともむろん大切なことである。しかしその内容をどのようなものとするかによって、この領域の教育は必要なものにも不必要なものにも、望ましいものにもあってはならないものにもなるであろう。今後どんな内容の教育をその中に内包すべきか。子どもの意識や行動についての実証的なデータをふまえ、そしてその教育の場として、

家庭、学校、地域（社会）のそれぞれの領域を視野に入れながら、今後十分な論議をすすめることが必要であろう。

さし当たりこの領域での教育に際して、今のところ全ての人びとに共通理解の得られそうな内容は、子どもたちに身近な市民生活上の社会的行動ルールを教えること、そしてその底辺に「他人（家族や友人）の人生に何らかの形で自分が役立とう」とする愛の感情や動機を育てることではなからうか。子どもばかりでなくおとなたちが、いわば自己愛に貫かれた行動原理に支配された生きかたを選択しているかのような現代において、これから人びとの間に生み出すべきものは、自分と同じ世界に住む他者への愛ではなからうか。そしてさらに、どこまでを「自分と同じ世界に住む人びと」として包含できるか、その範囲をどこまで広いものとしてゆくか、これもまたこの領域の教育に当たるおとな（親や教師）の手に委ねられている課題であると思われる。こうした内容をもつ新しい「市民教育」、それを子どもたちの上にどうやって具現すべきかが、今後の大切な教育課題となってゆくのではあるまいか。こうした道徳心を育てる市民教育を、学校がその一端を担う必要があることはむろんだが、それは主として家庭や地域、社会でより広く持続的に行われるべき性質をもっている教育であることも自明であろう。